翻　訳

明治の「発信する知識人」としての女子教育家 ―下田歌子と津田梅子

Meiji Women's Educators as Public Intellectuals:
Shimoda Utako and Tsuda Umeko

リンダ・L・ジョンソン 著
Linda L. JOHNSON

香川 せつ子 監訳　　村上 まどか・志渡岡 理恵 共訳
KAGAWA Setsuko　　MURAKAMI Madoka, SHIDOOKA Rie

下田歌子（1854-1936、出生名 平尾鉐（ひらおせき））と津田梅子（1864-1929、出生名 津田むめ（う））は、女子教育者として夙に知られている。しかし二人はそれ以上に、「発信する知識人」として組織を導き、社会的政治的改革の問題に関する書物を著すことによって、広義に明治時代の言説に貢献したのである。デイヴィッド・アンバラス（David Ambaras）は、当時の新興中流階級の支配的男性を「国家の諸問題と国民の日常生活を論じる押しも押されもせぬ権威」[1]とみなしたが、下田と津田は彼らのように、広範囲な女子教育の重要性を明言し、女性の経済的自足を達成する機会の拡大を訴え、国家と近代化に関する公の論議に関与したのである。本稿は下田と津田の「発信する知識人」（public intellectuals）たる役割の論考であり、二人が女子教育者として職業的な成功を収めた要因を検討し、二人の教育的哲学とそれを具現するために設立した教育機関を分析し、女性の組織における指導者的手腕を論じ、新興中流階級という男性に偏った概念に対する寄与を評価するものである。

下田と津田の職業生活はわずかに交差したのみであったが、二人は多くの点を共有し、それらの共通点は、明治時代の女性が公の論議に参画した際の好機と制約の両面を示唆している。下田も津田も愛国心を自らの言説を正当化するのに用い[2]、女性の地位を国家の進歩と力の指標として解釈していた。女性が経済的に自活する能力を育成する必要性を認めながらも、二人とも女性を教育することの理論的根拠を、個人の利益というよりも全体の利益になるという観点で明言していた。しかしながら、二人とも男女平等を主張することはなく、婦人参政権運動にも携わらず、女性の政治的権利の拡張も唱えなかった。

傑出したキャリアの開発

下田と津田の学問的才能を認め、専門的キャリアを予見した人々は、二人が明治の女性に開かれた新たな好機を利用できるように支援した。新興中流階級の多くの男性と同様に、下田と津田の知性は政府に仕えた父親譲りであった。アンバラスによれば、「職業的成功やキャリアの目標という新たな概念を吸収しながら、公への奉仕と人々の生活向上を目指した知的道徳的涵養を重んじる家風を、（二人は）受け継いだ」[3]のである。父親からの初期の影響と相俟って、二人の女性は言語、文学、文化に造詣が深く、国際的感覚を持っており、二人のキャリアは洋行と国際交流によって形成されたことが顕著である。

下田はまず漢文の学習に頭角を現し、利発だという評判になった。漢学は徳川時代の教育を席巻しており、明治時代も良家の子女の教育とみなされていた[4]。漢学者の平尾一族に（平尾錄蔵（じゅうぞう）の長女として）生まれ、下田は中国の古典を学び、歌詠み（三十一文字の和歌）[5]の神童という名声を得た。日本の貴族文化の「女性的」伝統の中心として、和歌を詠むことは女子教育の重要な部分とみなされていた[6]。かくして下田の名声は、伝統的な「女性らしい」学究という含みをはらんだ学問的文学的業績に基づいていた。

下田が受けた古典的教育とは対照的に、津田の流暢な英語と英語圏文学への精通は、近代的な知識と国家的な新機軸を体現していた。父親の津田仙（せん）は蘭学者であり、アンバラスによれば、西洋の学問を幅広く日本人に届けた士族のキリスト教知識人であった[7]。仙は、日本人キリスト教徒、宣教師ら、そしてキリスト教主導の国際的改革組織の指導者であり、西洋キリスト教の影響を受けたカリキュラムを重んじる数々の教育機関の設立を支援した[8]。また、アメリカ合衆国で生活する経験と流暢な英語を習得することの重要性を例証しようとして、仙は6歳の娘を10年間アメリカ留学させるという大胆な一歩を踏み出した[9]。後年、梅子が『女学世界』に寄せた手記では、12歳でシーザー、ジョゼフィーヌ、ダーウィンの伝記に親しみ、スコットやディケンズを読み、ロングフェローやブライアントの詩も読んだと回想している[10]。津田への学校教育は、首都ワシントンにおけるジョージタウン・カレジエト・インスティチュートとアーチャー・インスティチュートというエリート女子学校で施された。下田も津田も、当時の女性はもちろん日本人男性の標準から見ても高度な教育を受けたのであり、異文化の伝統を学びながら、道徳的な啓発の宝庫としての言語と文学への理解を深めていった。

明治政府が女性の役割と地位に関する公の言説を形成することに積極的に取り組むにつれて、下田と津田は日本の新たな政治的エリートの贔屓に預かった。津田の合衆国での勉学は、天皇・皇后のお墨付きである。天皇は、日本女性には公教育の機会がないと言及していたし、皇后は「御国の婦人らのために勉学に励むよう、」[11]津田に使命を与えたのである。しかしながら美子（はるこ）皇后は、下田とはもっと親密な関係があり、下田は1873年から1880年まで宮廷歌人として、また漢文の師として皇后に仕えていた。この地位において下田は漢

文・和文の学識を、天皇に進講した儒学者・元田永孚（もとだながざね）をはじめとする当時最も傑出した学者とともに培うことができた。下田は宮中の地位も上がり漢文を能くしたので、古典的教養と婦徳の模範として名を馳せた[12]。

明治の政治家・伊藤博文（1841-1909）[13]は、下田と津田を引き合わせ、日本の優れた女子教育者の名声にたがわぬ地位を二人に約束した。下田が結婚のため宮廷を辞し、ほどなく夫を亡くした後[14]、自宅で私塾を開くように提案したのは伊藤である。「歌子という女は偉い奴じゃ。博学多才であるし、立派な見識を持っている。弁舌もなかなか達者なもので、男ならさしずめ大臣たるべき資格を備えている」[15]と、伊藤は心酔した。伊藤の助言に基づいて、下田は桃夭女塾（1881-1885）という、上流階級の婦女子に漢文・古文を教える塾を開設した[16]。一方、津田は、1871年の最初の渡米をした際に同行した岩倉使節団の一員たる伊藤と、1882年帰国後、旧交を温めており、伊藤が津田を下田に紹介したのである。津田は桃夭女塾で英語教師を始め、下田は津田に日本語の日常会話を教えた[17]。

下田の塾を中核として、伊藤は貴族階級の娘たちのために政府が出資する教育機関を開発すべく注力した。1885年に華族女学校が創立され、下田は学監、津田は英語科主任に任命された[18]。華族女学校の後援者として美子皇后は、保守的な校風を重んじ、頻回な式典での宮中作法を堅持し、教育内容にも具体的に踏み込んだ[19]。伊藤に促され華族女学校の教職に就いたことによって、下田と津田は皇后の庇護を受け続け、経済的に安定し、宮中の特権的地位とともに日本女性の中でも最高の職位を得たのである。

下田と津田は例外的な教育の機会に恵まれ、明治の政治家とも繋がったことで公の場に現れたけれども、やはり女子教育と女性の役割に関して、公人として批判の的になる可能性もあった。学をつけた女性の数と影響が増大するにつれて、急増する出版メディアが彼女らを格好の標的にした。マラ・パテッシオ（Mara Patessio）の観察では、徳川時代にも女学生や女性教師は存在していたが、明治時代に公の場に現れたことで「物議をかもし」[20]、服装や言動が取りざたされ、明治の出版界で批判されたのである。1889年に読売新聞は女学校と女学生を攻撃する一連の記事を載せ、「放縦、道楽、不品行」[21]と書きたてた。時事新報は、昨今の少女は「異国作法の模倣を試みるによって女を男に変容している」と嘆いた[22]。さらに辛辣には、津田とともにアメリカ留学した後、慈善事業のパイオニアとして称えられ、華族女学校創立にも携わった「鹿鳴館の華」[23]大山捨松が、1898年の小説では意地悪な継母として描かれ貶められた[24]。そして下田自身、頓挫した結婚を詰られ、伊藤博文との関係を含む夥しいスキャンダルで辱められた[25]。下田の醜聞は近代女性の教育に反対する人々の所為だとして、津田はアメリカの養母アデライン・ドッジ・ランマン（Adeline Dodge Lanman、1824-1914）に書簡を送っている。

> 日本は今や混迷しています。女子教育等の問題は、下田氏や（大山）捨松のような活躍中の著名人に推進されていますが、時流に反する古老にあげつらわれています。彼

女らに対するひどい話も見られます。もちろん政治的理由もあるのですが、取り沙汰される人物は、必ずしも愉快ではない公の場にさらされるのです[26]。

津田は、伊藤博文との不適切な関係に結びつく噂を食い止めようと、自分自身で（具体的には明かさない）策を講じたと書いてランマン夫人を安堵させた[27]。津田が公のあざけりを避けるために行動を変えたこと、大山捨松が（陰ながら津田の教育を支援し続けたものの）公共の場から退いたこと、女学校、とりわけ宣教師主導の学校への入学者が減少したこと―これらは皆、有名人への誹謗中傷が女子教育と、女性の公の場への進出を阻止するための有効な手段だったことを示している。下田も津田も特権階級の庇護を受けながら名誉ある教育機関で教えることに重きを置いたのは、明治時代の女子教育が物議をかもす政治的風土と、二人が「発信する知識人」として脅かされる危険性に配慮したためである。

日本で最も栄誉ある女学校の教員として、下田と津田は合衆国と大英帝国の主要な女子学校と交流するための招待を受けた。これらの経験によって、二人の教育哲学と、女性の向上への関わりが根本的に形作られた。1889年、中学校と同等の学歴しか持たなかった津田は、華族女学校から2年間（後に3年に延長）の休暇が認められ、アメリカで教授法を学んだ。フィラデルフィア郊外にあるブリンマー大学の特待生として入学し、生物学を専攻し3年間勉学に励んだのである[28]。ブリンマーでは、設立に携わった学部長M・ケアリ・トマス（M. Carey Thomas）の教育的卓見に津田は開眼した。トマスは実に女子大学運営のパイオニアであり、アメリカで最高水準の大学教育、すなわち優秀な男子大学に匹敵する教育を授ける女性中心の学びの場として、ブリンマーを形成していた[29]。自身が語学教師として津田は、言語学習は「上流階級の女子と婦人」の「趣向と判断を培う」[30]というトマスの見解に惹きつけられた。ブリンマーでは学生が自立して考え意見を表明することを教員から期待されており、津田はそうした教員による個人メンター制度の真価を実感した。後年、津田とともに日本で教えたブリンマーの級友、アナ・ハーツホーン（Anna Hartshorne）は、「ブリンマーの最高品質、広い精神、徹底性、精確な学識が彼女に根差したのであり、彼女の教育的理想の不可欠な要素となった」[31]と結論づけている。

ブリンマーで勉学をともにした女性たちの多くは津田と同様に教師であり、女性の進歩のために働くたゆみない義務感を共有しており、津田は彼女らとの交わりによって開花した。1891年1月、津田はニューヨークのオスウィーゴ師範学校に編入し、日本でも確立し始めていたヨハン・ペスタロッチ（Johannes Pestalozzi）の言語教授法を研究した[32]。アメリカ留学中、津田は大学レベルの教育と最新の語学教授法の知識を獲得し、英語の流暢さと相俟って、日本で最も権威ある英語教師として認識されるようになった。

一方、下田は西洋の女子学校の視察に影響を受けながらも、西洋経験から得た知見は津田とは異なっていた。女性皇族を教育するという任務を得て、下田は1893年からの留学中ほとんどをイギリスで過ごし、ヴィクトリア女王に謁見した後[33]、1895年まで視察旅行

を延長し、フランス、イタリア、ドイツ、スイス、カナダ、そしてアメリカの女子学校を見て回った。日本に戻るや否や、下田は見聞を本や有力な雑誌『太陽』に出版し、裕福なヴィクトリア朝の家庭での妻と母の役割に絶大な関心を表明した。とりわけ、子育てと子どもの人格形成における女性の直接的な関わりに意見を述べた[34]。下田は、家庭を切り盛りするイギリス女性の役割に、日本に向けての指針を見出したのである。そして家庭経営は、家の中よりもむしろ学校でよりよく開発されるべき一連の技能であった[35]。庶民向けの学校での調査を行うことによって、下田は、イギリスの一般大衆が教養を備えた忠実で健全な市民たらんとする能力に感銘を受けた。訓練された女性の労働力と、国家の産業開発の成功は密接に繋がっていると理解を深めたのである[36]。実用的技能に重きを置いた下田の教育哲学と、家庭経営に重きを置いた下田の女性役割観は、西洋視察旅行で培われたのだった。

津田に話を戻すと、東京に自ら女子学校を設立したいという望みを抱いて、1898年、イギリスの女子学校を巡回する機会を求めた。東京の英国国教会の宣教師たちを通じて、津田は18人の「著名な貴婦人」から招待を受けており、その中にはチェルトナム・レディーズ・カレッジ校長にしてオックスフォードのセント・ヒルダズ・カレッジ創立者のドロシア・ビール（Dorothea Beale）がいた。津田は、ケンブリッジ大学の女子カレッジをいくつか訪れ、チェルトナム・レディーズ・カレッジの教員たちに1か月間インタビューし、セント・ヒルダズに1学期間在籍し、オックスフォード大学の講義を聴講した。津田を最も印象づけた教育者は、ヴィクトリア朝女子教育の権威ドロシア・ビールであった。ビールは、津田によれば「イギリス女子教育のパイオニア」であり、チェルトナム・レディーズ・カレッジの中に、「イギリス女子中等教育に大いなる影響を与えた」[37]組織を作り上げたのである。

上流階級の女子学生に、名声ある男子大学に匹敵する教育を授けるということは、津田にとって啓示的であった―創立者ビールが計画し、資金を出し、学生の選抜も含めた細部まで運営した学校が理想だった[38]。津田はイギリスの女子学校を巡回訪問することによって、たとえ併設校でも不平等な「男子学校の付属」として女性を周縁化するのではなく、女子教育は女子だけの学校で実施するという信念を強くした。そしておそらく津田の心に最も響いたのは、ビールがここ何十年でこの仕事を成し遂げたことである。「イギリスでの教育の進歩を目の当たりにするのは励みになります。というのは、日本は今、ビール先生が生涯をかけた仕事を始めた時とまったく同じ悪い状態に置かれているからです」[39]と津田は記した。

かくして津田と下田は西洋研修旅行中に、国際人的視野と、女子と女性の教育の多様なモデルの知識と、近代国家における女性役割観を広げたのである。その見識は、二人に女子教育の指導者としてのみならず、「発信する知識人」としてのより大きな役割を担わせることとなった。

下田と津田が帰国したのは日本が日清戦争（1894-95）に勝利した後であり、ナショナリズムと子育ての重要性の認識が高まる中で、女子教育の新たな法制度が定められた。下田と津田が教えた華族女学校の細川潤次郎校長は、富国強兵に貢献するという根拠に基づいて女子教育の必要性を論じた[40]。1895年発布の高等女学校規程は、就学年数を定め、カリキュラムに要する授業科目を制定し、良妻賢母主義を女子教育の使命として確立した。1899年発布の高等女学校令と実業学校令は、各都道府県に4年間の学修期間を持つ高等女学校を設立するように要請した。シャロン・ノルト（Sharon Nolte）とサリー・ヘイスティングズ（Sally Hastings）が述べたように、「この法制度は初等教育修了後の教育を女性に施す公立学校の数を増やすことと、女性に提供される教育の幅を狭めることの効果を同時に果たした」[41]のである。この法体制はまた、文部省管轄の学校での宗教教育と儀式を禁じ、キリスト教ミッションスクールが女子教育に果たした役割を矮小化した[42]。女子教育に対するメディアの批判と政府の規制に対応して、下田と津田は実用的職業的技能を重んじる学術教育機関を確立することに心血を注いだ。

自己修養と実学
下田歌子の教育的ヴィジョン

下田は古典文学者としての名声に浴し、貴族の娘たちに教える職を務め、教育機関の多様なモデルに精通していたので、1899年発布の高等女学校令と実業学校令に呼応して女子のための新たな学校を創立するのに相応しい立場にいた。とりわけ下田は儒学を能くし、イギリスでの子育てと家庭経営における女性の役割を調査したことで、女子教育を支援するために儒教のレトリックを再概念化することができた。従って下田は、「良妻賢母」という規範は女性の扱いで復古的な伝統的儒教的価値観ではなく、「男は仕事、女は家事・育児という労働の近代的性別役割分業に適応し合致した概念―近代社会と国民国家の形成に不可欠な『近代的』思想」[43]に基づくという小山静子の主張を例証するものである。

イギリスから帰国すると、下田は良妻賢母イデオロギーの進化と合致した女子教育の役割について、広く講義と出版を行った。1898年に帝国婦人協会という女性主導の組織を設立し、演説、ネットワーク形成、ロビー活動、基金調達を通じて、女子教育の問題に大衆の注意を引きつけた。その協会の趣意書では、下田は西洋ではなく日本的価値観に基づいた女性のためのカリキュラム開発の必要性を論じた[44]。西洋流の技術的訓練（家政学、数学、科学）と伝統的日本の婦徳の伝授を融合しようとしたのである。下田は低所得層の女子の教育的機会の拡大を訴え、日本の経済的未来は、教育を身につけた女性労働力にかかっており、女性は新たな雇用機会（例として電信係、店員、看護婦、工場労働者）を入手できると論じた[45]。下田は、職業的技能で女性を訓練することによって、家族に貢献し、必要

なら自活自営できるようになると唱えたのである[46]。帝国婦人協会の後押しを得て、下田はビジネス、産業技術、看護を教える女子教育機関の多様なネットワークを確立しようと希求した[47]。以前は家庭内、家族間で非公式に教えられてきた職業技能を、女性向けの正規の教育として制度化することを思い描いたのである。

1899年、下田は実践女学校と女子工芸学校を創立することによって、教育理念を具現化しようと試みた。これらの学校は儒教的教育観に従って、知識の伝授よりも倫理的価値を教え込むことを優先にした[48]。下田は女学校や女子教育にありがちな批判に、明治時代の新儒家のいう「自己修養」の言説を適用することによって対応したのである。下田が選んだ「実践」という名称は、「理」と「実学」の間の学術研究的関連性についての徳川時代と明治初期の言説を参照し、女子教育の理念として利用したのである。この言説は「自己実現」を広範囲な社会目標と統合させることにより[49]、教育を付けた女性は我儘で個人主義が行き過ぎるという非難に対処した。渋沢栄一[50]を含めた明治の他の知識人同様に、下田は、新儒学の「自己修養」の言説を明治国家の経済的政治的目標のために変容し、正当化することに貢献したのである。

日本の女子教育で講義する一方で、下田は日本の男性教育家とともに、中国における教育開発の相談役を務め、中国の学生を日本に留学させた[51]。下田の漢学の知識、中国の保守・革新双方の改革者の信頼を得るように教育目標を伝授する能力、そして日本での職業的名声によって、中国女性の教育を一任される権威が備わっていたのである。下田は日本で唱えたのと同じ女子教育のヴィジョン―伝統的な婦徳に根差した道徳教育を、家庭と国家の利益のために実用的技能と結びつける公教育カリキュラム―によって、中国をも席巻した[52]。義和団事件（1899-1901）を経て清王朝が教育改革に柔軟になると、京師大学堂（北京大学の前身）教授であり中央政府の教育顧問を務めた服部宇之吉（1867-1939）は、中国女性の教育を下田に託してはと西太后に進言した[53]。下田はイギリス滞在中に支配権を求める国際競争の問題に意識を高めていたので[54]、中国での働きは、西洋の侵略に対してアジアを防衛する手段としての女子教育をますます正当化することとなった[55]。

帝国婦人協会の後援を得て設立され、下田が校長を務めた学校は、日本で最初に中国女子留学生を受け入れた。中国女性は1901年から実践女学校に入学し、入学者数の増加とともに下田は校内に中国留学生部を設置し、教員の短期養成と、手工芸の課程を設けた。中国の女子学校には、1901年から1905年の間に推定103人の生徒がいた。一方で特筆すべきは、約2倍の中国からの若い留学生が東京にある実践女学校で教育を受けていたのである。中国人留学生のためのカリキュラムは、一般教育と実用技能課程の両方を含んでいた。歴史、物理、化学、地理、数学、家政学、音楽、裁縫、工芸、そして体育が必修科目であった。このカリキュラムは中国の初級師範学堂と中学堂と同様であり、小学堂教師を養成するために設計されていた[56]。実践女学校では、中国の若い女性は以前の世代の「迷信」や「不毛な」信仰や慣習から解き放たれ、科学的に訓練された家庭の主婦となるべく教

育されたのである[57]。

下田は中国女性の教育と日本の低所得層の女子教育を同列に考えていたようである。実用的職業的技能の開発が彼女らに喫緊の課題と信じてのことである。下田は中国人留学生について、「遠路はるばる留学しているのだから、生半可な教育は施せない」[58]と言っていた。下田自ら修身すべての授業を受け持ち、自著『支那留学生の為の修身講話』を用いて、忠・孝といった伝統的儒教倫理と、衛生学のような当時のカリキュラムを結びつける講義を行った[59]。

イギリスの女子学校における体育教育の役割に感銘を受けた下田は、体育を中国人留学生の身体的欠点に対応する手段として擁護した[60]。纏足の縛りを受けた女性の身体の弱みと中国の弱みを結びつけ、下田は彼女らが足を解き放って、必修の美容体操授業に参加することによる身体的変容を奨励したのである[61]。しかしながら下田は決して、体育をカリキュラムに導入した最初の女性教師ではない。日本では宣教師主導の女学校が日本の少女のために身体訓練を導入していたからである。だがクリスチャンの教師らが体育を女子の自由の感覚を高める手段として考えていた一方で[62]、下田は女子の身体を強靭にすることを唱え、母親と子どもと、究極的には中国の健康を促進する手段として、栄養と衛生の改良を唱えたのである[63]。

実践女学校の中国人留学生は、高度に統制管理された教育を経験した。衣服や身だしなみに関しては、彼女らは日本の慣習に従うように要求され、和服を身にまとい日本風に髪を結った[64]。有事には中国と緊迫した関係になる恐れ故、留学生は校内で分断されていた。下田と教職員は、中国人留学生の校外活動を制限し、「境界」を設けた。中国からの留学生は校舎の2階にある寮に住み、毎週36時間もの強化授業を受けたので、自由時間は限られていた。1908年の外国留学生規程の導入とともに、さらなる規制が課せられた。寮内の留学生の活動は監視され、実践の教職員の同伴がなければ寮からの外出が許されなくなったのである[65]。公共の場で彼女らの自由を制約した意図は、人徳を守るためばかりでなく、政治的活動に関わらないようにするためであった[66]。1910年以降、中国でも同じ教育の機会が得られるようになり、実践女学校への中国人留学生の入学は著しく減った[67]。下田が個人的に中国女性を教えた期間は比較的短かったが、中国で教職に就くように推薦した日本女性と、実践女学校を卒業して帰国し、新設の女子小学堂で教えるようになった中国女性の間で、下田はネットワークの中心となったのである。

自立と社会貢献のための女子教育
津田梅子の教育的ヴィジョン

下田と同様に津田は、女性が職業的機会を広げ、新たな家庭責任を果たせるようになる

という教育的展望に取り組んだ。しかしながら津田はまた、婚姻関係や、究極的には女性の法律的地位に影響する教育の役割も視野に入れていたのである。二人とも、人格の発達を助け、倫理的価値を教え込むことのほうが、単なる知識の伝授よりも重要だと考えていた。だが下田のカリキュラムは家政学を含めて実用的知識を重んじ優先していた一方で、津田はアメリカ（とりわけブリンマー大学）で受けた「リベラルアーツ教育」に価値を置き、自立した個人を発達させたのである。津田は伝統的な日本を非難して、「女性は雇われもせず仕事もなく、完全に依存しており自活する手段を持たない…女性は自分の名前で財産を所有することもできず、アイデンティティは父親、夫、あるいは男性親族に埋没しているのです。それゆえ独立心は完全に欠落しています」[68]と書いた。津田は女性の自立心のなさを制限付きの教育の所為だとし、それでは知性を開花させることができないとしたのである。「最近まで、女子教育は制限がありすぎて女たちは依存の人生以外は歩めませんでした。男がすることをしたいとも、偉人の思想を理解したいとも、知的な喜びに満ちた生活をしたいとも、望まなかったのです。女たちが受けた訓練によって優しい淑女と愛される妻になることはできました―気立てと手作業の技術は教えられたけれど、知性は未開発のままだったのです。」[69]

女性の伝統的訓練に対する津田の根源的批判は、それが道徳的人格の涵養という最優先課題を欠落させていたことにある。

> 学校での勉強、本から学ぶ知識、技能教育がすべてではなく、女子の道徳教育と人格形成が教育者の最大の目標―これは男にも当てはまる事実です。では精神を安定させ強靭にするのに必要な経験を得ようとしても、彼女らの現在の偏狭な生活にどんなチャンスがあると言うのでしょうか。それに、人類の遺産たる事実の知識もなく、善悪を明確に区別し、偏見よりも理性、はき違えた感情よりも義務を重んじる理性的訓練も受けないまま、いかに男に伍した女性の最高かつ最良の人格を育成できるのでしょうか[70]。

かくして津田は、男女問わずリベラルアーツ教育が、安定した社会を促進する人格的資質を発達させる手段として、偏狭な技能教育よりも効果的であると論じたのである。

下田も含めて良妻賢母の唱道者が、家庭経営と子育ての科学的方法を取ることによって家庭における女性の権威を広げると論じた一方で、津田はリベラルアーツ教育の役割に焦点を当て、夫と妻、息子と母親の間の共感―家族の絆を強くする共感を育もうとした。良妻賢母の唱道者は家庭責任の拡大を近代的な発展であると主張したが、これでは女たちが仕える男性への従属を強調してしまうと津田は述べ、伝統的家庭内における女性の広範な責務を枚挙した。

女性の領域は家庭にあり、夫のために細々（こまごま）とした日常生活のすべてに気を配り、自らの手で多くの奉仕行為をしているのが主婦です。夫が必要とするすべてが整っているように目を配り、呼ばれたら飛んで行き、―知的で、準備良く、従順に夫の望みを叶える。夫が仕事に出ている間は、せわしなく家庭を整頓し、家事の細部まで見届けるのです[71]。

従って津田は、女性が担っている多くの家事を否定的に見つめ、家庭の場を女性が力を発揮する機会ではなく、女性の隷従の場であると捉えた。これらの義務を果たすために、少女らは尊敬に値する特質を発達させるよりも、従順に服従するよう社会化されると津田は主張した。

女性の主な美徳は服従、従順、そして慎みと礼儀をもって他人の望みにおもねることなのです。人生の大ごとについては自分より上の人たちの判断に従わなければならず、将来の幸福は幼少期から自分を抑えて他人を喜ばせる力の獲得にかかっています。いかなる場合も人当たりよく笑みを絶やさないことを期待されています。どんな女性の役目でも、相手を喜ばせるのが義務であり、素直さと優しさで自分よりも上の人たちの歓心を得るのです[72]。

この事態は女性ばかりでなく男性にとっても損失でもあると津田は論じた。願わくば、女性のリベラルアーツ教育を通じて、互いに伴侶となる結婚を思い描いたのである。

文化、教育、そして経験なくして女性が共有できるものは男の人生の最低限にすぎず、理想的な妻・母には不足なのです。それゆえ未来の日本女性に最も必要なのは、リベラルアーツ教育を通して、単に男性の付属物ではない、共感的な役立つ伴侶・助力者となることです[73]。

津田は究極的に、リベラルアーツ教育こそ女性の地位を高め、女性によって国家の進歩に貢献することができ、将来的には法律上の平等も達成できると予見した。「あらゆる風潮が女性の地位の向上を進める方向だとはいえませんが…日本女性は男に伍して前進せねばなりません。そうすれば、実際においても、法律的にも理論的にも、女性は男性とどんどん平等な立場になっていくでしょう」[74]と、津田は楽観的に書いた。津田は基本的な男女平等は唱えなかったが、それはリベラルアーツ教育を普及させれば結果的についてくると予想したのである。そこで津田にとっての教育改革は、必然的に法律改革よりも先であった。

女性のリベラルアーツ教育が家族と国家に利益をもたらすと強調する一方で、津田はまた、女性が自主的であるだけでなく、必要あらば経済的に自活できるようになる教育の必

要性を認めていた。

> リベラルアーツ教育に加えて、可能ならあらゆる女性が、教育か産業のどこかで、ささやかでも自活できるようになる訓練を受けるべきです。これは女性の適性と能力に合うならば、教育、物書き、看護、料理、裁縫、何でもよいのです。そのような特別訓練の大いなる必要性は、状況によって女性に時折見受けられてきました。そんなつもりは全くなかったはずでも、災難に見舞われるとなけなしの財源とともに取り残されるのです[75]。

1900年、津田は女子英学塾を開学した。日本女性に自立する精神と自足させる職業資格を授けることに献身するためである。英語のカリキュラムは、生徒たちが1899年の高等女学校令に即して設置された高等女学校の教員となることができるように編成されていた。しかし津田は、英語カリキュラムにはもっと広い価値があると信じ、「英語の便利さと商業的価値を脇においても、西洋の言語の完全な習得、とりわけ文学の研究は、東洋人の我々にとって西洋の思想、理念、ものの見方への扉を開く鍵となります。英語圏の文学は、すでに『新日本』を形作るのに貢献してきましたが、最良の倫理思想と教育に我々を導いてくれるのです」[76]と記した。かくして津田のカリキュラムの重点は、下田によるアジア的価値と西洋科学の統合とは異なっていた。津田はゼミ形式の教育方法を取り、生徒が文学を読み、自分の意見を形成し、流暢な英語で表現することを要求した。講義や暗記よりも討論のほうがよいと津田は述べ、「出来合いの他人の意見を覚えても、複雑に変わりゆく世の中の問題に対峙するには不十分なのです」[77]と説明した。

人格開発を対外的に示し、女子生徒や女子教育をする学校への巷の批判に気を配りながら、津田は生徒の学業水準を高く保ち、受けた教育を社会に還元するように激励した。最初の授業では、公に行動を批判されたら女子高等教育に支障を来す恐れがあると津田は警告し、「批判は当然来ますけれど、その対象は教育課程や学修方法ではなく、自分で少し気を付けて思慮深くすべき点―真の淑女に相応しい事柄―言葉遣い、人との交際の仕方、細々（こまごま）とした礼儀作法への気配り、といったことに向けられます」[78]と述べた。女子教育は自己満足的な興味を駆り立てるという巷の批判に対処して、津田は卒業生に、社会的活動に従事するよう繰り返し強く勧めた。津田の主張は、「何をおいても、学校の目的は人格教育であり、少女らを精神的肉体的のみならず、魂において強くし、教育の真の目的は自分自身の歓びや進歩ではなく、人を助ける力なのだと感じさせること」[79]であった。先述した下田は、主として妻・母の役割において国家を強くする政治的観点から女子教育を正当化したが、津田は、卒業生らが職業的技能を用いて社会に貢献することにより、女性の地位を究極的に引き上げると主張したのである。

女性の知の回路と権力のネットワーク

新興中流階級の分析の中で、デイヴィッド・アンバラスは、新しい情報と実践を伝えるためには「知の回路」と「権力のネットワーク」が重要であると指摘している。アンバラスによって描写された新興中流階級の男性たちと同様に、下田と津田も講演や著作で発信を行い、それらは彼女たちの職業上の評判をより確かなものにし、彼女たちの権威を家庭、学校、そして愛国的・社会改良的な団体へと広げた[80]。自らの高度な専門的見解が確実に広く受け入れられるように、新興中流階級の男性たちは、専門的で特殊な研究の大衆（通俗）版を出版し、一般誌や中流階級の女性向け雑誌に記事を寄稿したとアンバラスは述べている[81]。下田と津田は、国内外の女性誌に寄稿し、女性を中心に据えた日本の新興中流階級の表象を創出した。またマラ・パテッシオが、拡大する女性の読者層の重要性や、それが婦人会（女性の協会）[82]の増加と関連していることを突きとめたように、下田と津田も、自らの社会改良の戦略を推進するために、複数の国際的な女性の組織をつくり、率いた。日本の法律は女性が政治に参加し、団結して法律改正を求めることを禁じていたけれども、国家が掲げる軍国主義と愛国主義を支持する婦人会への参加は、女性がお墨付きを得て公共圏へ参与する方法だった。

下田は、主に慈善活動を行い、愛国主義を推し進めるために、上流の女性たちをまとめて組織をつくった。1901年、彼女は、退役軍人の家族を助けるために奥村五百子（1845-1907）によって創設された愛国婦人会（Patriotic Women's Association）の指導部に加わった[83]。下田は、この愛国婦人会の規約を書き、そこでは「日本女性に社会についての教育を施し」、「国家のための慈善活動」（国家的慈善事業）を行うという創設者たちの意図が述べられていた。協会は、女性の愛国心は国のために子どもを育て、家庭を倹約して切り盛りすることに反映されると宣言した[84]。内務省・陸軍省や、この協会は女性を公的生活に組み込むための手段と捉える下田のような教育者の支持を得て、協会の会員数は膨らみ、ついには地方支部に教師や農家の妻、工場労働者らを含むまでに増加した。下田がこの組織の会長を務めていた1920年から1927年の間、彼女の通俗巡回講話、彼女が創設に関わった教育や社会奉仕を行う支部のおかげで、愛国婦人会の会員数は40％増え、140万人に達した[85]。女性の政治組織と協力関係を結ぶことで、下田の教育および慈善事業は正規の教育機関を越えて広がり、主に国家のイニシアティブを支持することにより、彼女は率先して女性を公共圏へと組み込む機会まで手にすることができた。

女子教育の先導者という職業上の地位は、下田の出版物の人気と売れ行きを高めた。和歌以外の出版物は、発展しつつある家庭（「家庭 home」もしくは「家政household」）というカテゴリーに含まれる諸問題に取り組んだものだった。徳育に加え、下田の専門は家政学という発展しつつある学問分野で、彼女はそれを華族女学校でも実践女学校でも教えた。1902年、彼女は講義集『家政学』を出版した。「家事經濟」、「家内衛生」、「飲食」をはじめ

とする章の中で、彼女は、現在の家政に関する学問に相当するような技能と知識の諸カテゴリーを設定した。自著および他の日本人の女子教育者の著作の翻訳がスムーズに進むように、彼女は1901年、上海に出版社「作新社」をつくった[86]。この出版社は、下田の『家政学』や成瀬仁蔵の『女子教育』、雑誌『Dalu』（大陸）も出版した[87]。

下田の出版物は、日本でも中国でも、彼女の学校に通う生徒たちの教科書としてばかりでなく、そこで提供されている家政に関する実践的知識の恩恵にあずかろうとする女性たちの手引書としても役立った。以前は家庭で教えられていたことや技能に関する新しい知識・方法を教えるために学校を設立したのと同様に、下田は、子育てや家政に関する最新の科学的知識・実践を国の強化と結びつけるために講義集や著作を出版した。膨大な数の出版物を通して下田は、女性読者たちに新興中流階級の規範に則った日常生活の送り方について細やかな指示を与えた。その範囲は、家政や子育て、栄養、衛生に関することだけにとどまらず、エチケットや言葉遣いにまで及んでいた。

津田の出版物とトランスナショナルな女性の組織の発展は彼女の職業上の評判を高めたが、それは運営資金の調達や学生募集、有能な教員の採用により女子英学塾を軌道に乗せることを主な目的としていた。ブリンマー大学で学んでいた頃の個人的な後援者であったフィラデルフィアの慈善家メアリ・ウィスター・モリス（Mary Wistar Morris）とともに津田は、自らが創設した学校の財政を安定させ、かつ後の世代の日本女性たちが自分と同じように米国で高等教育を受ける機会を得られるように、二つの資金調達委員会を設立した[88]。日本女性が合衆国で4年間学ぶための資金を提供する「日本女性米国奨学金委員会」は、前例のない国際的な委員会だった。津田は女子教育者とキリスト教の聖職者から成る日本側委員会の委員長を務め、彼女たちは奨学金の受給者を選考した。モリスはフィラデルフィアの女性慈善家から成るアメリカ側委員会の委員長を務め、彼女たちは資金集めと受給者の学問の監督を担当した。アメリカ側委員会のメンバーの多くは、「日本における津田嬢の女子学校を支援する委員会」のメンバーでもあり、女子英学塾の運営資金を寄付し、篤志教員を提供した。ブリンマー大学で培った卒業生組織の知識に基づき、津田は同窓会を立ち上げた。これは、卒業生のための類似の組織であり、卒業生たちは資金援助をしたり、無償で学校の手伝いをしたり、学校を支援するためのチャリティ・イベントに参加したりした。津田は年刊の会報で卒業生たちに発信した。彼女たちは、日本全国に広がる女学校の教員のネットワークを形成していた。

津田が率いたトランスナショナルな女性の組織の中で最も大規模なものはキリスト教女子青年会（YWCA）で、1905年に東京支部が設立され、津田はその初代会長に任命された[89]。20世紀初頭のYWCAは中流階級の女子高等教育の推進に積極的で[90]、津田はYWCA東京支部における自らの地位を活用して、日本における女子教育とキリスト教福音主義を結びつけた。女子英学塾の学生たちによって設立されたYWCAの分会のおかげで、津田は、日本の文部省の規定により禁止されていたキリスト教の儀式に携わることなく、学生たちの

中にキリスト教精神を育むことができた。国際的な女性の組織、特にＹＷＣＡに参加することにより、文化や国の違いを越えて女性の教育と進歩に力を注ぐ女性文化に対する信念は、津田の中で強まっていったようだ[91]。

一連の講演、記事、共著の中で津田は、主としてアメリカの聴衆に、中でも女性たちに語りかけ、彼女たちに日本における女性の地位を知らせ、女子教育を推進し、キリスト教を広める重要性を強調した。彼女の学校と奨学金基金に寄付する気になってほしいという思いからだったのだろうが、津田は、女子教育と、それが日本において近代国民国家および女性の地位と関係していることについて、より広範な諸問題にも取り組んだ。津田は、寄付金を集めるために、女性慈善家の家で一連の「座談会」を行い（これらは後にアメリカ宣教師の小冊子や新聞に掲載された）[92]、1891年には同僚のアリス・M・ベーコン（Alice M. Bacon）と共著*Japanese Girls and Women*を著し[93]、その中で日本女性の従属の元凶を分析し、その是正には教育が必要だと主張した[94]。日本では、津田は、一連の英語の教科書と翻訳、雑誌『英学新報』（英語教授法の進歩）を出版して英語教育の先導者としての評判を高め、女子英学塾は一流の女子高等教育機関であると宣伝し、人格形成にとって有用であると奨励する文学を全国に広めた[95]。

津田と下田はともに職業上、自らの考えを広めるためにマスメディアの発展から利を得たが、彼女たちもまた女子教育、さらには近代日本国家における女性の役割に焦点を当てることにより、女性のマスメディア消費者を増加・多様化させた。

下田も津田も国際的な知の回路と権力のネットワークを形成した一方で、自らが公共圏に参与することにお墨付きを得る戦略として日本のナショナリズムの言説を利用した。男性によってつくられたこの言説に対して、二人は、日本における女性の地位を高めるような女性版ナショナリズムを展開するという貢献をした。20世紀転換期の日本におけるナショナリズムの言説は、日本・中国の主権への途切れることのない西洋の脅威という文脈の中で展開しており、下田と津田は、日本女性は今まさに必死に行われている国の強化に欠かすことのできない当事者であると主張した。ナショナリズムの言説の要素をうまく利用した結果、下田と津田は読者や聴衆の幅を広げ、屈指の男性の政治家や知識人たちと交流することができた。

中国政府の相談役を担っていた下田歌子は、中国人留学生たちを教育するばかりでなく、西洋からの侵略に対抗して東アジアを強化するというより大きな目標を明言するのに相応しい立場にあった。下田は、男性が牛耳っていた汎アジア主義計画の中心に教育を据えたばかりでなく、女子教育を西洋の諸勢力に挑むための基盤とした。人種は彼女の国際的な権力闘争の分析において重要な部分を占めており、教育はその闘争の結末に決定的な影響を及ぼすとされていた。たとえば1902年、東京で中国人の男女の聴衆に向かって下田は、「黄色人種」が弱いのは、すべての弱国―彼女は朝鮮、ヴェトナム、ビルマ、トルコをその中に含めた―がそうであるように、少女や女性たちを教育しなかったからだと主張し

た。下田は「欧米の白色人種」を引き合いに出し、欧米では女性はよい教育を受けていて強いと述べ、次のように促した。「国に戻り、女子教育を男子教育の基盤として推進しなさい。そうすれば、あなた方の国が豊かになるばかりでなく、私たちアジア、黄色人種もきっと繁栄するでしょう。そして、私たちは白色人種と競い合うことができるでしょう」[96]。

汎アジア主義計画の中心に女性を据えるために下田は、清王朝の弱さと纏足で衰弱した中国女性の身体を同一視し、中国の知的・身体的な弱さはアジアが西洋と競う際に明らかに足手まといとなると述べた。中国の政治家や留学生たちと個人的に仕事をすることでお墨付きを得て汎アジア主義の言説に参与することにより、下田は、日本が中国の近代化計画に関わるのを擁護するにあたり、近衛篤麿ら日本の主な政治家たちが享受していた地位にまで昇りつめた。中国女性の教育に下田が果たした役割は、彼女の政治的な評判を確固たるものにし、彼女の個人資産を増やしたが、そのことが彼女の教育哲学にどのような影響を及ぼし、日本女性にとっての優先事項をどう考えるようになったかについては議論の余地がある。ある意味でそれは、国の強化と競争力向上の鍵となるのは女性の果たす役割であると彼女が論じる領域を広げた。しかしながら、それはまた、彼女の注意を女性の身体的・精神的弱さとされるものに向け、女性を抑圧する制度上の障壁ではなく女性自身に責めを負わせた。

ナショナリズムの言説が津田の著作に果たした役割は下田の場合ほど重要なものではなかったが、文化ナショナリズムの言説の要素は、津田が女子教育をより広範な知的議論の中に置くことを可能にした。文化ナショナリズムの分析に取り組む知識人たちは、西洋との権力闘争の中で犠牲にされるよりむしろ保持されるべき日本文化の唯一無二の特質を見極めるのに熱心だった。津田は、日本の女性の地位が低くなったのは外国からの影響によるものとみなした。「外部からの影響力はすべて女性の地位を低下させるのに手を貸した」と彼女は主張し、「インドから導入された仏教と中国由来の儒教の教えはともに女性を貶める傾向にあった」と述べた[97]。下田がアジアの女性たちを結びつけて西洋に対抗しようとしたのに対して、津田は女性の地位を中国やインドと対比して日本をもちあげる根拠として用い、たとえば、「日本にとって名誉なことには…日本女性はいかなる時も中国やインドの女性たちが置かれている奴隷状態にまで堕ちたことはないのだ」と主張した[98]。

日本人の国民性についての津田の分析は女性にのみ焦点を当てており、保持する価値がある国民性の要素を、女性特有の性質という観点から論じた。西洋の文学カリキュラムを擁護する時でさえ、彼女は、「古来の礼儀正しく優しい物腰は、棄て去られたり軽んじられたりすべきではない」[99]と主張した。しかしながら、文化ナショナリズムの言説の存在は津田に対して、おなじみの処方箋―日本の文化的アイデンティティと日本文化の精髄の保持―を提供し、それを用いて彼女は女性の利益のために論じた。女性に偏った津田による日本の文化的アイデンティティの定義の弱点は、女性の振る舞いに対する従来の期待を引き続き要求してしまうことだった。津田は、女性の知的自立を主張することと、従属的

な立場を反映した女性の振る舞いに対する伝統的期待に沿うよう女性に要求することの間に、何の矛盾も認めなかった。

発信する女性知識人と新しい中流階級の女性の社会的構築

デイヴィッド・アンバラスは、新興中流階級は文化的統一体として20世紀初めに立ち現れたと論じ、「世紀転換期の日本において新興中流階級は、イデオロギーに基づき創出されたものと政治的な交渉のマトリクスを通して、また経済的利益を共有しているという感覚を通して自意識を形成していった」と述べている[100]。下田歌子と津田梅子が果たした役割に関するこの研究は、彼女たちがイデオロギーに基づき創出したものと、彼女たちが発信する知識人として関与した政治的な交渉を分析してきた。この研究は、二つの女性の協会と彼女たちが創設した教育機関だけに焦点を当てた諸々の研究よりも、明治時代の社会に対する彼女たちの貢献についてより広範に分析し、組織のリーダーおよびメディアとしての彼女たちの役割に光を当てた。新興中流階級の男性たちが如何にして女性を国民国家に組み込むかについて議論していた時に、下田と津田はその議論を利用して、女子教育の場を広げた。女子教育は女性を明治国家に組み込む基盤と捉える点では二人は一致していたけれども、下田が女性は妻・母としての役割において国家に組み込まれると主張したのに対し、津田は社会貢献の義務を負った個人として組み込まれると論じた。両者ともエージェンシーの発揮につながる徳性、倫理性、責任能力を育むことを強調した。知育と徳育は、尊敬ひいては主体性―公共圏に参与するための必須条件―に値する人物を生み出した。下田も津田も女性の参政権運動などの政治活動は支持しなかったが、二人とも職業と慈善活動を通して女性が公共圏に参与することを思い描いた。尊敬される女子教育の権威として、彼女たちは、独身のキャリア・ウーマンの役割を世間がより受け入れやすいものにし、教え子である女性の教員や管理的地位にある者を通じて自らの影響力を伸ばしていった。国際競争への不安が高まる社会の中で、日本女性の代弁者としての下田と津田の評判は日本の国境を越えた。

注

1. David R. Ambaras, "Social Knowledge, Cultural Capital, and the New Middle Class in Japan, 1895-1912," *Journal of Japanese Studies* 24, no. 1 (Winter 1998): 33. アンバラスは、新興中流階級のメンバーを男性としたが、女性ジャーナリストで教育者の羽仁もと子だけは例外としている。Ibid., 25.

2. 明治時代、女性は「国家」を持ち出すことで公共圏に参与するのを正当化した、とマーニー・S・アンダーソンは論じている。 Anderson, *A Place in Public: Women's Rights in Meiji Japan* (Cambridge: Harvard University Asia Center, 2010), 15, 18, 101, 129, 144.

3. レベッカ・コープランドは明治時代の女性作家について「彼女たちの父親や兄、夫は、しばしば教育

者や官僚として重要な地位にあった。これらの女性たちの多くは、女性が得られる範囲内で最高の教育を受けていた」と述べたが、下田と津田はその実例である。 Ambaras, "Social Knowledge," 8. 以下も参照。Copeland, *Lost Leaves: Women Writers of Meiji Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000), 37.

4. Margaret Mehl, *Private Academies of Chinese Learning in Meiji Japan: The Decline and Transformation of the Kangaku Juku* (Copenhagen: Nordic Institute of Asian Studies, 2003), 6. メールは、漢学を「中国の文献に関する学問で、古典に含まれる真実を確定するために古典の精読に重点を置く」と定義している。Ibid., 29. 漢学は伝統的に男性の領域とみなされ、少女たちは中国の古典を学ぶことを概して奨励されなかったが、例外があり、その多くは、下田のように、漢学者の娘たちだった。メールは、明治時代に教育者として活躍した漢学者の娘たちを何人か突きとめ、それには「日尾直子（1829-97）、棚橋絢子（1839-1939）、三輪田真佐子（1843-1927）、跡見花蹊（1840-1926）、下田が含まれる」。Ibid., 82, 89, 124.

5. Paula Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," in Joshua A. Fogel, ed., *Late Qing China and Meiji Japan: Political and Cultural Aspects* (Norwalk, Conn.: EastBridge, 2004), 111.

6. 下田は、5歳で歌詠みを始めた神童であると言われた。Fujimura Zenkichi, *Shimoda Utako sensei den: denki Shimoda Utako* (Tokyo: Ozorasha, 1989), 7.

7. Ambaras, "Social Knowledge," 10-11.

8. 津田仙は、1878年の大親睦会（第1回全国基督教信徒大親睦会）の会長であり、妻で梅子の母親でもある津田初子（1843-1909）とともに節酒運動の指導者になった。Takasaki Soji, *Tsuda Sen hyōden* (Urayasu: Sofukan, 2008), 113-19.

9. 津田仙は当時、黒田清隆率いる北海道開拓使の役人で、黒田の企画で女子留学生たちはアメリカに派遣された。日本語および英語で書かれた膨大な数の資料がこのプロジェクトについて説明している。最新のものは以下の通りである。Terasawa Ryū, *Meiji no joshi ryūgakusei: saisho ni umi o wattata gonin no shōjo* (Tokyo: Heibonsha, 2009), 13-118; Kameda Kinuko, *Tsuda Umeko: Hitori no meikyōshi no kiseki* (Tokyo: Sobunsha shuppan, 2005), 9-66.

10. Tsuda Umeko, *Tsuda Umeko monjo* (Tokyo-to Kodaira-shi: Tsuda-Juku Daigaku, 1980), 78-79. 津田はこの回想録を英語で書いた。

11. 天皇は、「我が国では女性たちに十分な教育が施されていないために、多くの女性たちは文明開化の意味が理解できていない」と言ったとされている。Terasawa, *Meiji no joshi ryūgakusei*, 24-25. 津田の他にアメリカに派遣された4人の女子留学生は、吉益亮子（14歳）、上田悌子（14歳）、大山捨松（旧姓は山川、11歳）、永井繁子（7歳）だった。吉益と上田は1年経たないうちに帰国した。残り3名―大山、永井、津田―は、生涯の友となり、津田の教育プロジェクトを支援した。

12. Copeland, *Lost Leaves*, 36-37.

13. 伊藤博文は、日本の内閣総理大臣を4期務め、明治憲法や貴族院令を起草し、日清国交正常化に中心的な役割を果たした。

14. 下田歌子の夫で剣客だった下田猛雄は1884年に死去した。

15. Akiko Kuno, *Unexpected Destinations: The Poignant Story of Japan's First Vassar Graduate* (New York: Kodansha, 1993), 160,

16. 女性の漢学者が自分自身の塾を開けたのは、塾長となる男性の親族がいない場合に限られた、とマーガレット・メールは示唆している。たとえば、夫の死後、三輪田真佐子は、夫の家族と暮らすことも再婚することも拒んだ。彼女は1880年、松山に漢学塾を開いた。Mehl, *Private Academies*, 83. 当時、伊藤が下田に与えた影響については、以下参照。Fujimura, *Shimoda Utako sensei den*, 197-98.

17. Umeko Tsuda, *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*, edited by Yoshiko Furuki et al. (New York: Weatherhill, 1991), 167-68.

18. 数々の英語の肩書が下田の地位につけられてきた。しかしながら、彼女の地位が谷干城（たてき）に次ぐもの

だったのは明らかで、彼は1884年、貴族の息子たちの学校である学習院の院長に就任した。谷は以前、陸軍士官学校長を務めていた。華族女学校は、もともとは学習院とは別の独立した機関として設立された。華族女学校は、それぞれ6年間の初等部と中等部に分けられていた。入学資格試験をくぐり抜けなければならない少女たちがいた一方で、貴族の娘たちには入学資格があった。Naruse Jinzō, "The Education of Japanese Women," in Okuma Shigenobu and Marcus Bourned Huish, eds., *Fifty Years of New Japan* (London: Smith, Elder, 1909), 207. 宮内省の命で、華族女学校は1906年、学習院女学部になった。下田はその変更に反対し、最終的に辞職した。 Kida Junichirō, *Meiji no onna*, vol. 9 in the *Meiji no gunzo* series (Tokyo: San'ichi shobō, 1969), 98.

19. 若桑みどりは、『明治天皇紀』（明治天皇の年代記）の第6巻―皇后が頻繁に華族女学校を訪れ、若い女性のための本は彼女たちの徳を育むべきと考えていたと記している―を引用し、宮廷からの指示で書かれた若い女性のための修身書が、どの程度までより伝統に沿うかたちで次第に儒教的な解釈を婦徳に対し施していったかを分析している。Wakakuwa, "The Gender System in the Imperial State," *U.S.- Japan Women's Journal*, no. 20-21 (2001): 30-31. 皇后は『婦女鑑』（女性の模範）の編纂を提案したとされており、これは女性のための修身書で、皇后は華族女学校の生徒たちに配布した。

20. Mara Patessio, *Women and the Public Life in Early Meiji Japan: The Development of the Feminist Movement* (Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 2011), 25.

21. Margaret Burton, *Education of Women in Japan* (New York: Fleming H. Revell, 1914), 66; Patessio, *Women and Public Life*, 65-67.『読売新聞』に掲載された攻撃記事は、他の複数の新聞でも取り上げられた。

22. Ibid., 66,

23. 鹿鳴館は、東京にあるフランスのルネサンス様式の建築物で、日本政府の命により外国貴賓のためにパーティーや舞踏会を催すために建てられた。

24. Patessio, *Women and Public Life*, 67; Kuno, *Unexpected Destinations*, 158-64, 184-87.「アメリカの母」アデライン・ランマンとの書簡のやり取りの中で、津田は、大山をめぐるスキャンダラスな噂がアメリカにまで届いていることに驚きをあらわにしている。Tsuda, *The Attic Letters*, 297.

25. 古木宜志子は、下田に関する噂がまるで真実であるかのように伝えている。Furuki, *The White Plum, a Biography of Ume Tsuda: Pioneer in the Higher Education of Japanese Women* (New York: Weatherhill, 1991) 紀田によって、その「スキャンダル」は確認され、新聞記事が引用され、噂は論駁された。Kida, *Meiji no onna*, 79-80, 96-97.

26. Tsuda, *The Attic Letters*, 304-5.

27. Ibid., 305.

28. ブリンマー大学における津田の勉学は、フィラデルフィアの慈善家メアリ・ウィスター・モリスからの援助を受けた。彼女は、ブリンマーでの手続きを引き受け、津田の私的支出を賄った。津田の *The Attic Letters* の年表によれば、1889年7月、津田は2年間の休暇を認められ、1889年9月にブリンマーに入学、1891年1月にはニューヨークのオスウィーゴ師範学校に行き、1891年6月、1年間の休暇延長が認められ、1892年8月に帰国した。

29. Helen Lefkowitz Horowitz, *Alma Mater: Design and Experience in the Women's Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1985, 1993), 115-16.

30. Horowitz, *Alma Mater*, 119.

31. 以下に引用されている。Furuki, *The White Plum*, 86.

32. Mark E. Lincicome, *Principle, Praxis, and the Politics of Educational Reform in Meiji Japan* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1995), 69-71.

33. 下田の視察旅行は佐々木高行によって手筈が整えられた。彼は、皇太子の教育を担当していた。Fujimura, *Shimoda Utako sensei den*, 264-65, 752-53.

34. Ibid., 255, 259, 261.

35. Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 114.

36. Ibid., 115.

37. Tsuda, *Tsuda Umeko monjo*, 286.

38. Ibid., 283.

39. Ibid.

40. Koyama Shizuko, *Ryōsai Kenbo: The Educational Ideal of "Good Wife, Wise Mother in Modern Japan*, trans. Stephen Filler (Leiden: Brill, 2013), 38.

41. Sharon Nolte and Sally Ann Hastings, "The Meiji State's Policy Toward Women, 1890- 1910," in Gail Lee Bernstein, ed., *Recreating Japanese Women, 1600-1945* (Berkeley: University of California Press, 1991), 158.

42. アン・M・ハリントンは、1899年の法律制定後、私立学校は衰退した、と指摘している。Harrington, "Women and Higher Education in the Japanese Empire (1895-1945)," *Journal of Asian History* 21, no. 2 (1987), 172.

43. Koyama, *Ryōsai Kenbo*, vii. 小山は、ほぼ男性の良妻賢母擁護者のみに言及している。

44. ポーラ・ハレルは、これは津田への批判だった、と示唆している。Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 117.

45. Fujimura, *Shimoda Utako Sensei den*, 338-43.

46. Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 120.

47. Ibid., 117-18.

48. Joan Judge, *The Precious Raft of History: The Past, the West, and the Woman Question in China* (Stanford: Stanford University Press, 2008), 149-50.

49. Gregory K. Ornatowski, "On the Boundary between 'Religious' and 'Secular': The Ideal and Practice of Neo-Confucian Self Cultivation in Modern Japanese Economic Life," *Japanese Journal of Religious Studies* 25, no. 3-4 (1998), 347.

50. Ibid.

51. Paula Harrell, *Sowing the Seeds of Change: Chinese Students, Japanese Teachers, 1895-1905* (Stanford: Stanford University Press, 1992), 69.

52. Paul J. Bailey, *Gender and Education in China: Gender Discourses and Women's Schooling in the Early Twentieth Century* (New York: Routledge, 2007), 8.

53. Takeuchi Yoshimi, *Kindai Nihon to Chūgoku* (Tokyo: Asahi shinbunsha, 1974), 213, 216; Kazuko Ono and Joshua A. Fogel, *Chinese Women in a Century of Revolution, 1850-1950* (Stanford, California: Stanford University Press, 1989), 56.

54. Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 115.

55. Judge, *The Precious Raft of History*, 111-12.

56. Xiaoping Cong, *Teachers 'Schools and the Making of the Modern Chinese Nation-State, 1897-1937* (Vancouver: University of British Columbia Press, 2007), 50. このカリキュラムは、1904年に中国で規定された条例に整合していた。

57. Bailey, *Gender and Education in China*, 45.

58. Judge, *The Precious Raft of History*, 115.

59. Ibid., 114-15.

60. Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 115.

61. 中国人留学生たちが下田自身の修身の授業よりも3倍長い時間を美容体操の授業に費やしていることから、下田は実際には徳育より体育のほうが重要とみなしていたのだ、とジョーン・ジャッジは論じている。Judge, *The Precious Raft of History*, 74, 115, 119; idem, "Talent, Virtue, and the Nation:

Chinese Nationalisms and Female Subjectivities in the Early Twentieth Century," *American Historical Review* 106, no. 3 (June 2001), 788.

62. Yuk-Heung Li, *Women's Education in Meiji Japan and the Development of Christian Girls' Schools* (Hong Kong: Hong Kong University, 1993), 252.

63. Kida, *Meiji no onna* , 94-95.

64. Judge, "Talent, Virtue, and the Nation," 779-80.

65. Joan Judge, "Between *Nei* and *Wai*: Chinese Woman Students in Japan in the Early Twentieth Century," in Byrna Goodman and Wendy Larson, eds., *Gender in Motion: Divisions of Labor and Cultural Change in Late Imperial and Modern China* (Lanham, Md.: Rowman & Littlefield, 2005), 132.

66. これらの規制にもかかわらず、中国人留学生たちは学外の社会・政治的活動に関わった、とジャッジは指摘している。「この時期に公的・政治的活動に従事しようとした圧倒的多数の中国女性は、日本、特に下田の実践女学校の教室で学んでいた」。Judge, "Between *Nei* and *Wai*," 132-33.

67. Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 127.

68. Tsuda, *Tsuda Umeko monjo*, 23.

69. Ibid., 30.

70. Ibid., 72.

71. Ibid., 38.

72. Ibid., 36.

73. Ibid., 73, 74.

74. Ibid., 91-92.

75. Ibid., 75.

76. Ibid., 96-97.

77. Ibid., 106.

78. Ibid., 198-99.

79. Tsuda Juku Daigaku, *Miss Tsuda's School for Girls* (Tokyo: Tsuda Juku Daigaku, 1908), 14.

80. Ambaras, "Social Knowledge," 22.

81. Ibid., 22.

82. Patessio, *Women and Public Life*, 18, 108.

83. Fujimura, *Shimoda Utako sensei den*, 535.

84. Sheldon Garon, "Women's Groups and the Japanese State: Contending Approaches to Political Integration, 1890-1945 " *Journal of Japanese Studies* 12, no. 1 (Winter 1993), 15.

85. Harrell, "The Meiji 'New Woman' and China," 144.

86. Takeuchi, *Kindai Nihon to Chügoku*, 208.

87. Judge, *The Precious Raft of History*, 114; idem, "Talent, Virtue, and the Nation," 773-75.

88. Linda L. Johnson, "The Greatest Peaceful Revolution in Our Time: The American Women's Scholarship for Japanese Women," in Andrea Walton, ed., *Women and Philanthropy in Education* (Indianapolis: University of Indiana Press, 2004), 298.

89. Margaret Prang, *A Heart at Leisure from Itself: Caroline Macdonald of Japan* (Vancouver: University of British Columbia, 1997), 40.

90. Ibid., 42, 43.

91. Ibid., 294.

92. Tsuda, *Tsuda Umeko monjo*, 28-38.

93. アリス・ベーコンは*Japanese Girls and Women* の唯一の著者のように見えるが、津田はこの本の執筆にあたり、共著者として密接に関わった。それは、「混声」のひとつの例のように思われる。同じ所見が―特に武家の女性の教育に関して―津田の著作においても述べられている。Barbara Rose,

Tsuda Umeko and Women's Education in Japan (New Haven: Yale University Press, 1992), 88.

94. Alice Mabel Bacon, *Japanese Girls and Women* (Boston: Houghton Mifflin, 1891), 81-82.

95. 津田の英語教育に関する著作には以下のものがある。*Selected Stories in English for Japanese Students Arranged with Notes* (1900); *English Stories Selected for Japanese Students* (1st ed. 1901); *Old Greek Stories* (trans. 1902); *The Story of Don Quixote* (trans. 1902); *The Adventures of Baron Munchusen* (trans. 1902); *The Story of Jon of Iceland* (trans. 1903); *A Tale of Two Cities* (condensed and translated, 1903); *Easy English Stories* (1905); John Halifax, *Gentleman* (trans. 1909); *Five Stories from Miss Edgeworth* (trans. 1910; これは唯一の女性作家の作品の翻訳であり、この18世紀の女性作家は作品の中で女子教育を擁護した。); *Les Miserables* (condensed and translated, 1912); *Girls' Taisho Readers*, 5 vols, (editorial group, 1916); *English Stories* (trans. 1918); *Girls' New Taisho Readers*, 5 vols, (editorial group, 1921); *Pearl Readers* (editorial group, 1925); *Manual for Pearl Readers* (1926); 以下を参照。Tsuda, *Tsuda Umeko monjo*, 518-19. 日英併記の日本の古典は "Leaves from Japanese Literature"として出版された (Ibid., 196-259)。

96. Judge, "Talent, Virtue, and the Nation," 776.

97. Tsuda, *Tsuda Umeko monjo*, 30.

98. Ibid., 30.

99. Bacon, *Japanese Girls and Women*, 53.

100. Ambaras, "Social Knowledge," 30

訳者解題

本稿は、Linda L. Johnson, “Meiji Women’s Educators as Public Intellectuals: Shimoda Utako and Tsuda Umeko” *U.S.-Japan Women’s Journal*, 2013, No. 44, pp. 67-92 の全訳である。下田歌子の氏名をタイトルに掲げた最初の英文文献と言っていいだろう。

著者Johnson氏は、近代東アジア史を専攻するベテラン研究者であり、1983年にスタンフォード大学で博士号取得後、ミネソタ州のコンコーデイア大学に勤務して2016年に退職、現在は同大学名誉教授となっている。著者の日本史研究歴は長く、“The Cultural Nationalism of Tsuda Umeko” (in Roy Starrs ed., *Japanese cultural nationalism: at home and in the Asia Pacific*, Global Oriental, 2004)、“Contribution to the Most Promising Peaceful Revolution in Our Time: The American Women’s Scholarship for Japanese Women, 1893-1941” (in Andrea Walton ed., *Women and philanthropy in education*, Indiana University Press, 2005)、“Tsuda Umeko and a Transnational Network Supporting Women’s Higher Education in Japan During the Victorian Era” (*American Educational History Journal*, 2010), “Evangelists for Women’s Education: The Collaboration of Tsuda Umeko and Alice M. Bacon” (*Asian Cultural Studies*, 2012) 等、津田梅子とアメリカ女性とのトランスナショナルな協働をテーマとする文化史的研究を多数発表している。本論文はそれらの研究の延長線上にありながらも、津田と並び立つ人物として下田歌子に着目し、両者のpublic intellectualとしての特質を分析した優れた研究である。本論文のメインタイトルとなっているpublic intellectual とは、学識に加えて公共的政治的空間に積極的に関与する知識人を意味する。ここでは、下田と津田が女子教育者としての枠にとどまらず、公共の場に向けて発言し行動する知識人であったという事実をふまえて、「発信する知識人」と訳出した。

『下田歌子記念女性総合研究所年報』第8号、広井多鶴子（実践女子大学人間社会学部教授）の調査報告「下田歌子に関する研究論文一覧」にあるように、下田歌子に関する研究は1960年代より実践女子大学関係者の手により着実に進められてきたものの、女性史や教育史研究者が本格的な研究に着手したのは2010年前後であった。まとまった図書としては研究叢書『下田歌子と近代日本―良妻賢母論と女子教育の創出』（勁草書房、2021年）のみである。こうした日本での状況を考慮すると、2013年に発表されたJohnson論文は先駆的な研究と言える。さらに訳者が瞠目したのは、本論文以前に、下田歌子に着目した研究がJoan JudgeとPaula Harrellという北米の中国史研究者によって早くも2000年代に公刊されていることである。その業績は本論文の注にも記されている。Joan Judge（ヨーク大学教授）は “Talent, Virtue, and the Nature: Chinese Nationalism and Female Subjectivity in the Early Twentieth Century” (*American History Review*, 2002) および “Between *Nei* and *Wai* : Chinese Woman Students in Japan in the Early Twentieth Century” (in B. Goodman & W. Larson eds., *Gender in Motion; Division of Labor and Cultural Exchange in*

Late Imperial and Modern China, 2005）において、またPaula Harrell（ジョージタウン大学教授）は、“The Meiji ‘New Woman’ and China”（J. Forgel ed., *Late Qing China and Meiji Japan: Political and Cultural Aspects*, 2005)のなかで、ともに中国女子教育に多大な影響を与えた人物として下田歌子をとりあげ文化史的考察を行っている。Johnson自身による津田梅子を中心とした日米女性関係史の蓄積と、Judge とHarrell による中国史研究における下田歌子の発見という二つの潮流の交差したところで書かれたのが、本論文であると言える。またJohnsonによる下田研究と前後して、アメリカで研究する日本人学生による下田に関連した研究が博士号を授与されている[1]。日本人研究者によって英語で執筆され、アメリカで出版された英文図書もある[2]。これらはタイトルに下田歌子の名を掲げてはいないが、下田に関する詳細な考察がなされている。グローバル化を背景に、明治女性として稀有な国際人であり、発信する知識人でもあった下田歌子に関する研究は、今後日本の内外でますます重要となると思われる。（香川せつ子）

最後に、本論文の邦訳が実現した経緯について付言しておきたい。この翻訳は広井前所長によって提案された。兼務研究員（実践女子大学文学部英文学科教授）の村上と志渡岡に、前掲の研究叢書において第３章「下田歌子と津田梅子―西洋文化との出会いと女子教育の創出」を執筆した香川が加わり、翻訳チームが組まれた。主に前半（1－11頁）を村上が、後半（12－21頁）を志渡岡が担当し、全体の訳に香川が目を通したのちに、最終的な訳語の選定や解釈については三者で協議して合意した。

*U.S.-Japan Women's Journal*は城西国際大学とハワイ大学が提携して発行している。ハワイ大学言語学修士号の村上が同出版局（University of Hawai'i Press）に所定のフォームによって翻訳権を申請したところ、書誌情報明記を条件に翻訳許可が得られた。

当研究所『年報』への掲載を許可して頂いたハワイ大学出版局にお礼を申し上げる。

1 Masako Nohara Racel, *Finding their Place in the World: Meiji Intellectuals and the Japanese Construction of an East-West Binary, 1868-1912*, Ph.D. Thesis, Georgia State University, Scholarwork@Georgia State University, 2011.

2 Mamiko C. Suzuki, *Gendered Power: Educated Women of the Meiji Empress' Court*, University of Michigan Press: Ann Arbor, 2019.

りんだ・L・じょんそん／コンコーディア大学 歴史学部 名誉教授
かがわ・せつこ／西九州大学 名誉教授・津田塾大学言語文化研究所 特任研究員
むらかみ・まどか／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・文学部英文学科 教授
しどおか・りえ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・文学部英文学科 教授